

## 書 評

武部利男譯 『白樂天詩集』

東京 六興出版 一九八一年一月 三四六頁

かな書きによる、白樂天の詩の譯詩集、これが本書の特徴であるが、この意表をついた譯詩法が、この書に對する評價の分れるところでもある。ひらがな、それも平易な、現代日本語を用いた一つの詩集としての成果と、中國の字で書かれた詩を、半ば日本語化している中國の字をあえて全面排除して、ひらがなで全文を通す必要性と、この二つに問題の焦點は絞られるであろう。

中國の詩をできるだけ平易に口語譯しようという試みは、かなり以前から現在に至るまで續けられて來ている（漢詩の翻譯の歴史については、武部氏に詳細な論文がある。「文學」一九八〇年十二月）。漢詩に對し、訓讀、語釋、説明的譯詩という段階を経ても、なお不十分な從來の方法では、専門家

にとつてはとも角、非専門家には、原詩より更に複雑難解になつてしまつて、ますます敬遠の傾向を強める因となる。しかし、既成の中國の詩の翻譯の概念からすれば、徹頭徹尾かながき、固有名詞（時には普通の名詞もまじるが）にはカタカナが用いられるとはいふものの、譯詩の文はひらがなで貫くというのは、完全な型破りといえよう。段階式の、普遍的な方法に不便を感じた著者が開發した、新しい譯詩のスタイルである。筆者は始め一讀した時、分り易く、讀み易い譯詩の文だとの印象とともに、それ以上に心うたれたのは、上・下の文字の對照である。上段は、カタカナまじりのひらがな、それも縦・横ともかなりゆったりとした空間をもつて、バラバラと並んでいるのに對し、下段には、ごつごつと四角ばつた難しい字がぎっしりと窮屈に整列している様は、二つの國の文字の違いといった單純さ以上のものを示しているようである。

こうした種類の著書は、批評の論点をどこにおけばよいか難しく、この譯詩集が出版されたほぼ一ヶ月後に、著者が亡くなられたという特殊な事情も絡んで、複雑な思い

を禁じえない。

譯詩の文だけを追って行けば、そのリズムは、五七調か七五調のいずれかの調子がほとんどなので、時にひらがなの表記で、何を意味するのか首をかしげることはあっても、リズムカルな口調のよさにのせられて、なかなか面白い譯だな、で終ってしまいそうである。が、原詩と對照したうえで、譯の適否を論ずるとなると、注はほとんど付いていないし、原詩一行に對し、五言詩なら五七調一句、七言詩なら七五調二句、が譯詩の原則らしいことはほぼ察しえても、全てに詳細な検討を加えるとなると、繁瑣な作業であるばかりでなく、譯詩の文が忘れられてその味が薄くなること確實である。

筆者はこうした譯詩集の成果よりも、その必要性に少からず疑問を抱いていたのだが、この書評を書くにあたって各方面から拜借した資料を讀んでいるうちに、是非論以前のこととして、この譯詩のリズムのよさと、五七調、七五調の譯の定型が、著者の年敷をかけた苦心の結果生れたものだということを知ったのである。そこで著者の詩の翻譯

の足跡、それは同時に本書がいかにして成ったかの背後事情でもあるが、それを紹介し、多少の批判を加えることによって書評にかえたいと思う。

○

この譯詩集は、著者が過去に幾つかの雑誌に載せたものを基礎にしており、その主な雑誌は「V I K I N G」である(以後、Vの略稱を使わせていただく)。「おもいねんぐ」(秦中吟 重賦。本書では二八頁一篇を除いて全て「V」に掲載されている。内容、構成については後に述べるが、一二四篇の詩を収める。その中の二十二篇は、今から二十五年前、一九五七年八月に、東京創元社出版の「白樂天詩集」所収の詩を再録したものである(これには、先にあげた「おもいねんぐ」重賦も含まれている。以後これらの二つの「白樂天詩集」を、便宜上「舊版」「新版」と呼び分けさせていただく)。「舊版」は、諷諭詩二十篇(秦中吟六篇、新樂府十一篇を含む)、感傷詩二篇(長恨歌、琵琶行)、の計二二篇が収められており、白樂天の代表作といわれる「長恨歌」「琵琶行」以外は、諷諭詩ばかりで、著者の若き頃の氣概を偲ばせるものであ

る。一九五二年代から翻譯を開始して「V」には一九五三年十二月から連載し始めている。五〇號)、五年後に「舊版」を出しその成果を世に問うて後、なぜか譯詩の方は二十年近く中斷されている。

譯詩の再開は、一九七五年からであり、その理由は「新版」のあとがきに記してあるので省略するが、殆んど毎月毎號、譯詩を載せ、一九八〇年三月「V」三五一號までの、一〇二篇の詩、及び秦中吟、新樂府の序文二篇と、「舊版」の二二篇を加えて編集し、一九八一年一月に、この「新版」を刊行した(秦中吟、新樂府の序文は「V」には載せていない。

「新版」編集のうちに新しく譯されたものである)。この第二次の「新版」に収めた詩の譯詩の期間も、一九七五年から八〇年までであり、第一次の時と同じく五年だが、譯詩の数は、二二篇から一〇二篇へと五倍になっている。

「舊版」を出版したことは、「タケベ譯スタイル」更には「タケベさく」とまで同人に評される翻譯法が、形式的には一つの完成をみたことでもあったが、その後の二十年の沈黙は、詩の翻譯について、理論的思考の期間であった

ようだ。詩の譯はその間一篇も發表しなかったが、漢詩の翻譯についての論文を、たて續けに二篇書いている。一九六一年九月に、雑誌「無限」(八號)に、「漢詩の翻譯についての感想」、同じ年の十月に、「中國文學報」(第十五冊)

に、書評「倉石武四郎・須田禎一譯歷代詩選」、と題するものである。これらは武部氏の翻譯理論の第一期の論文であるが、後の第二期の論文(「文學」所載)のところであられる。

翻譯の實踐面、つまりかながき譯の、武部氏のこの當時の苦心の跡が分るものに、左の三篇がある。

「新豐折臂翁」 うでへしおった おじいさん

「縛戎人」 しばられた えびす

「賣炭翁」 すみうりの おじいさん

例えば、「賣炭翁」をあげると、

いちばの みなみの もんの そと 市南門外泥中歇

ぬかるみみちで ひとやすみ (一一二頁)

.....

きいろい きものの ちやぼうずと 黄衣使者白衫兒

しろい ふくきた へいたいと (一二三頁)

の。印のところ、最初の譯(雜誌「塔」一九五二年十一月、一一號)は、「ま。ち。の。み。な。み。の。……」「き。い。ろ。い。き。も。の。お。つ。か。い。と。し。ろ。い。き。も。の。わ。か。も。の。と。」になつており、前の部分の訂正は「V」ではなされず、「舊版」で行われており、後の部分は「V」(一九五四年八月、五四號)で、されている。また、注については、「塔」「V」でも一つ注が附けられているが、ひらがなの注である。

せんきん あまりも あるものを

(注) きん おもさのたんい

「舊版」以後は、漢字まじりの注とし、注も一つ増している。他の詩に關しても、注は「新版」が最も多くなつてゐる。

原詩も、「舊版」「新版」に、文字の異同があるが、ここにはふれない。ひらがな譯の訂正加筆は、勿論第二期の譯詩のころも行われている。

ひらがな譯に對する譯者自身のこうした苦心はあつたものの、一見大膽無謀とも思えるこの試みを、支え續けたのは「V」の同人なかまでであつただろう。原詩を併記しない

ひらがな譯、注は附いている時もあるが、最少限度であり、それもひらがな書きの譯、問題も式も隠されて、解答のみが示される形である。同人の創作が生眞面目に並ぶなかで、一種の空間藝術かと思われるこの譯詩は、一服の清涼劑などといつておれない面があつた。原詩及び注に對する同人の再三の要望にも應じることなく意志を曲げず、例會に出席の時も、他の同人なかまが白樂天の原詩を持參することがたまにあつても、自分で持ちこむことはたえてなかつたらしい。恐らくそれは譯者の意圖的な行爲であり、同人なかまに期待したものは、ひらがなで意が通じるか、詩になつてゐるか、の遠慮なき批評であつたらう。原詩を提示すれば、なまじ漢字文化圏の人間だけに、かえつて混亂が生じて説明が必要となり、譯者の目的は達成されないことになる危険がある。原詩は譯者が知っているのだから、詩として日本語としてダメな部分の指摘が得られれば、譯者が原詩と照して考え直す。自身でも「譯したら聞いてもらつて直す」(「V」五七號、例會記)との發言があり、武部氏所藏の「V」には、同人評を參考にして手を入れてある所が

かなりある。日本語ということばの文化を志向される専門家たちの意見、いや智慧と申すべきか、は得がたき收穫として大切に活用されていた。かつて富士正晴氏は、「舊版」の書評〔V〕八六號)のなかで、「VI KINGへ入って、ぼくが一番とくをしてると思います、との武部氏のことばの意味が分らない」と書かれたが、一冊の書物としてまとめたことの外に、「とくをしてる」と實感する事情が言わせた、寡黙な武部氏の精一杯の感謝のことばではなかつたのだろうか。

さて次に、「舊版」「新版」の「白樂天詩集」は、著者の翻譯詩の、一次、二次の成果として世に問われたものであることは言うまでもないが、中國の詩の、かながき翻譯という立場からいえば、その譯詩は白樂天から始まったものでないことを、少し述べておこう。

同じ唐代の詩人だが、武部氏の専門であつた李白の詩を、かながき翻譯の最初の對象とされた。「靜夜思」「子夜吳歌」「送友人」「塞下曲」「秋登宣城謝朓樓」の五首の詩であり、五言詩だが、五七調型の譯にはなっていない(一

九五一年一月、「V」二五號)。その後二年半ほど(一九五二年〜五四四年)は、白樂天の詩の翻譯が續き、次に杜甫の詩の譯を試みた時期が一年ほどある(一九五五年)。「石壕吏」「茅屋爲秋風所破歌」「兵車行」「新婚別」等の四篇の詩だが、これらも五七調、七五調型の譯詩ではない。以後は白樂天の詩に専念の時期が續くが、この李白・杜甫の詩については、うまくいかなかつたと、後に述べられている。

白樂天の譯は、初めから定型であり、五言詩は五七調一句、七言詩は七五調二句を一般的原則としており、結果としてスムーズにいったこの詩人の詩を續けることになつたのだろう。白詩と李・杜の詩の翻譯の成功不成功は、詩人の詩の本質的な違いによるものであつて、かながき翻譯が、全ての詩人の詩に適用できるものでない、いいかえれば限界が自ずとあることを感じられたのであろう。

○

それでは本書の内容にふれながら、少し詳しく述べてみよう(本書には、寛文生氏の解説、著者のあとがきも附されているので参照されたい)。「舊版」と異なり、「新版」は、Iか

らVまでの五章に分けて編集されており、

I 諷諭詩 秦中吟十篇 新樂府二九篇を含む 計四四篇

II 閑適詩 四四篇

III 感傷詩 長恨歌、琵琶行を含む一八篇

IV 雜律詩 一六篇

V その他 二篇（「白香山詩集」の後集）

となっており、白樂天自らが分類した體に倣っている。

詩の選擇は、その詩の内容が第一だったのだろうが、譯詩上の問題、それに右のそれぞれの分類に入る詩の數なども、終りごろには考慮されたようだ。「V」連載の詩を見ると、最後の一年くらいは、諷諭詩以外の詩、特に閑適詩が多くなっており、諷諭型の「舊版」に比べ、諷諭、閑適重視型（それぞれ四四篇）になっている。

詩の形式からいえば、五言絶句と七言律詩はなく、恐らくこの詩型は、ひらがな譯として日本語にこなれ難かったためではないだろうか。

ひらがな譯の詩が、抵抗なく、退屈することなく讀めるのは、この構成法とあながち無關係ではない。著者が譯詩

の定型とした五七調、七五調が實にうまく排列されているのである。

I 諷諭詩 秦中吟まで 五言詩 五七調

新樂府二九篇 七言詩 七五調

II 閑適詩 五言詩 五七調

III 感傷詩 五言詩 五七調繼續

長恨歌、琵琶行 七言詩 七五調

IV 雜律詩 七言絶句 七五調

V その他 五言詩 五七調

五言詩、七言詩のある程度の連續と交替は、五七調の簡潔で、力強い調子と、七五調二句のやや長い説明的で、流暢な調子との、變化の妙に富むものがある。

また五言詩を五七調一句、ひらがな一二字、七言詩を七五調二句、ひらがな二四字、というのは、五言と七言の漢字の僅か二字の差が、ひらがなでは、一二字と二四字、つまり二倍の差にもなっている。また五言詩一句は、漢字の二倍、七言詩一句は、漢字の三倍半のひらがなで譯されていて、以上のことを考えると、漢字とひらがなの差を、著

者がかなり意識していたことが知られる。だがこうした文字の加減だけでは、なお譯しきれないものがあり、これらの缺點を補うものとして、細かく分けられた段落と、五七調七五調というのを更に分解する方法とが、とられたものかと思う。

段落については、譯詩と同様に、「新版」までにかなり手を加えている。五七調七五調のリズムの分解というのは、例えは、

(一) 五言詩

むぎかりをみる 觀刈麥

ひまなつき いなかに ないが  
ごがつには ばい いそがしい  
ゆうべから みなみかぜ ふき  
いちめんに こむぎは きいろ

田家少閑月  
五月人倍忙  
夜來南風起  
小麥覆隴黃

3 } 5  
2 } 2 } 7  
5 } 4 } 7  
5 } 3 }

(二) 七言詩

びわのうた 琵琶行

ジンヨウの まち おおかわの  
ほとりに こよい とも おくる  
かえでの はっぱと おぎの はな  
つめたく あぎの かげが ふく

潯陽江頭夜送客  
楓葉荻花秋索索

5 } 5 } 7  
4 } 5 } 7  
3 } 2 }

5 } 7  
2 } 5  
4 } 7  
3 } 5  
3 } 5  
2 } 3

五七調、七五調の、五は2・3か3・2に分けられ、七は5・2、2・5、4・3に分けられる。文法的な基準ではない

が、句讀點を用いない一字の空白（ポーズ）の意味は、聲に出して讀むと、意外な重さをはっきりする。

こうした武部氏の細部に至るまで神經のゆき届いた譯詩法は、下に記されている原詩に比してもむだのない適切な譯詩の文と相俟って、一般的には成功しているといえよう。

が、ひらがな譯に譯しきれずに、意譯されてしまっていて、原詩を見るまで氣の付かぬ面もある。その多くは固有名詞の問題なのだが、たとえば幾つか例を示すと、

かねもちの やしきも いまに 不見馬家宅。  
ひとのてに わたるじゃないか 今作奉誠園。

（秦中吟 傷宅 三二、三三頁）

おしまれて いなかに さった 賢哉漢。二疎。  
いにしへの ひとは かしこい 彼獨是何人

（秦中吟 不致仕 三七頁）

あとをつぐ ひとは いま なく 寂寞東門路。  
あれはてた みやこの みちよ 無人繼去塵

（秦中吟 不致仕 三七頁）

そのために ひなびた ことは 所以綠窓琴。

ひ いちにち ほこりが つもる 日日生塵土

（秦中吟 五絃 四三頁）

おなじころ ろうやの なかで 豈知闕郷獄。  
しゅうじんが ごとえじにする 中有凍死囚

（秦中吟 歌舞 四五頁）

きんの にわとり ふすまの かげ 金鷄障下養爲兒  
ようしと なって おきにいり

（新樂府 胡旋女 六一、六〇頁）

せんになに いばれるほどだ 便可傲松喬。  
さかずきの さけも いらぬ 何假盃中深

（春日閑居 三二七頁）

などの原詩の。印を附した邊り、何か譯詩に今一工夫ほしいものである。故事來歴を持つ語の譯し足りなさとてもいえようか。その他に、

シコウや ブテイが かみがみに 上元太。一。虛祈禱  
おいのりしても かいがない

（新樂府 海漫漫 五二、五一頁）

などは、著者の解釋が入った譯に變えられており、



ひだりの うでは しっかりと 左臂憑肩右臂折

まごの かたに よりかかり

みぎの うでは とちゅうから

ああ むさんにも おれている

(新樂府 新豐折臂翁 六三頁)

は、七言一句に對して、七五調四句、四八字の長い譯になつてゐる。また、

はじめの ひこぼし おりひめが 豈期牛女爲參商

いまじゃ みつぼし なかごぼし

(新樂府 太行路 七一、七〇頁)

みつぎものとは ない ものを 任士貢有不貢無

みつぐ わけでは ありませぬ

(新樂府 道州民 九二、九一頁)

などは、ひらがな譯の意そのものが通じず、何かの補足を必要とするところだろう。

「V」同人評で指摘された點も含めて、筆者の氣の付いた點を幾つか擧げておいた。

この譯詩集には、五七調七五調リズムとは別に譯詩の文

の基調といったものが章毎にあり、I 諷諭詩は、力強く訴え、II 閑適詩は、ゆったりとのびやかに、III 感傷詩は、やさしくもの悲しく、IV 格律詩は、しんみりさりと、の譯を志されたかと思われ、特にVの七言絶句は、抒情性を帯び美しい。

あきの はじめ ラクユウエンに のぼる

立秋日登樂遊園

ひとり でかけて キョクコウの 獨行獨語曲江頭

いけの ほとりで ひとりごと 迴馬遲遲上樂遊

うまを めぐらし のほろろと 蕭颯涼風與衰鬢

ラクユウエンへ のぼりゆく 誰教計會一時秋

ひそと さびしい ずずかせと

はや おとろえた わが かみと

だれが ふたつを ひきあわせ

いちどに あきを つげるのか

この邊りになると、「V」連載五十回、譯詩の數も百首以上のキャリアがものをいってか、同人評もはや聲無しに近くなつてゐる。

○  
武部氏は、この「新版」刊行の前年、一九八〇年二月に、第二期の翻譯理論を發表されている。刊行の前年といつても、八〇年代は翻譯の實踐の方は、健康状態が最悪のため休んでおられ、「新版」所收の詩の譯が全部完成し、一段落の時期となつていた頃である。

「舊版」所收の譯詩に五年の歳月をかけ、出版して後三年目に、第一次の翻譯理論をまとめ、翻譯の實踐の方は二十年の空白があつたが、再開して後五年目に「新版」と、第二次の翻譯理論を本格的に執筆という、着着と堅實にまとめあげられたが、一九五二年に白樂天の詩の譯に手を染められて以來、通算三〇年の蓄積の年月であつた。

「漢詩翻譯のおぼえがき」(「文學」一九八〇年十二月)と題する一文は、武部氏の、この三十年にわたる漢詩の翻譯の總括の意を持つものである。その内容は、始めに漢詩の翻譯の歴史から入り、その實踐と理論の兩方面に分けて、過去の業績を挙げながら、自分の見解を加えて論を進める(直接の關連はないので、省略するが、翻譯の歴史を知る上では參

考になる論文である)。そして次いで、二五年前の武部氏自身の翻譯論(前掲のもの)の主旨を紹介している。

(一) 「歴代詩選」の倉石・須田の翻譯は失敗であり、その原因を、古典的日本語と七七調か七五調リズムの使用、の二点であるとし、漢詩は、散文、平易、通俗的な譯がよい。

(二) 原詩、訓讀、日本語譯—參考書型。日本語を主として、

原詩をそえる—翻譯型。の二つに分類し、詩は形式よりもリズムが大切であり、漢詩の譯は、書物の形式や譯の形式にとらわれずに、内容が大切である。

と述べる。その反面、自分の主張する理論とは異なつて、白樂天の詩の翻譯は五七調か七五調の定型譯になり、理論と實踐の矛盾を自ら認めて、故意の定型譯からの逃避よりも、自ずと定型譯になつてしまったことは、一面では形式主義からの脱皮と解釋される。

また、かながき譯の理由は、分り易さであり、漢字を用いながつたことについては、漢字の日本語としてのニュアンスのずれによる、など自問自答の形でその可否を述べ、かながきだけが漢詩の譯の唯一の方法ではないと結論する。

白樂天について試みただけのもので、李白・杜甫の詩については、前述したように失敗だった、という。また、かながき譯の思いつきは、倉石武四郎先生のかなもじ運動に觸發されたもので、嚴密な逐語譯は、吉川幸次郎先生の影響だと、二人の恩師の名をあげて論を結んでおられる。

平易、通俗、散文の譯。内容の重視。これが武部氏の翻譯理論の骨格であり、五七調七五調の定型譯は、自然な結果としてこうなったのだという。

三十年の年月をかけて白樂天の詩を一二四篇譯し、「新版」の「白樂天詩集」として一冊の書にまとめた武部氏のこのことばには説得性がある。

最後に、「舊版」及び「新版」の「白樂天詩集」の譯詩の下に併せ載せられた、白樂天の原詩について述べておきたいと思う。

著者は、この二つの譯詩集の底本としたものを明記されていない。問題はそこから生じている。全ての白樂天の詩の實際の譯にあたっては、「國譯漢文大成」の「白樂天詩

集」(汪立名編「白香山詩集」佐久節譯注)を用い、「新版」に併記した原詩は、「宋本」(一九五五年十月、「白氏長慶集」北京文學古籍刊行社影印のことか)による、と聞いている。「舊版」と「新版」の原詩も文字に異同があり、「舊版」も、那波本、紹興本、大成本(汪本)の何れの系統ともいえず不明な點がある。

ただ「舊版」と「新版」の原詩の相異だけならば、こうした譯詩集の性質上、その底本まで云々することはないので、譯詩の文と關り合うところがあると、事はさように簡單ではなくなる。かながき譯を誤譯とするか、原詩の校訂をするか、いずれにしろこのままでは矛盾するところがある。かながき譯の方では意譯されてしまっていて、逐語的には漢字との相異が隠されてしまう面もあるが、この點の見直しの不可能だったことを最後まで著者は氣にかけておられたとのことなので、訂正されることは今や無くなったが、筆者の氣の付いたところを挙げておこう。(原詩「新版」と譯詩の傍に。印を附した。「舊」は「舊版」、「成」は「大成」の略) きぐらいは た。か。い。け。れ。ど。も

雖云志氣在。

かおつきは どうにもならぬ

高 「舊」 「成」  
(秦中吟 傷友 三四頁)

たましいだけが のこされて

身死魂飛。骨不收

ほねは だれにも ひろわれず

孤 「舊」 「成」  
(新樂府 新豐折臂翁 六七、六五頁)

てに いっしやくの ふだをもち

手持勅。牒榜郷村

むらじゅう しらせて あるいてた

尺 「舊」 「成」  
(新樂府 杜陵叟 一一五、一一四頁)

それでも びわを だきかかえ

猶把。琵琶半遮面

はんぶん かおを かくしてる

抱 「舊」 「成」

……(略)……

この ジンヨウは かないな

潯陽小處無音樂

おんがくなどは ありません

地僻 「舊」 「成」

……(略)……

ちを はないて なく ほととぎす

杜鵑啼。哭猿哀鳴

かなしげに なく さるの こえ

血 「舊」 「成」  
(琵琶行 二九二・三〇一・三〇二頁、二九二・二九六頁)

みに。 つけるのは かわごろも

遣著皮裘繫毛帶

「新」 「舊」

けがわの おびを しめるのだ

身 「成」

ながやに ひしめく ひとびとは

比屋疲。人無處居  
(新樂府 縛戎人 一〇二、一〇一頁)

どこにも すむべき ばしよがない

齊 「成」

「新」 「舊」

などは 「新版」 「舊版」 ともに、「大成本」が底本のように

ある。

「舊版」以後、譯されたもので「新版」の原詩とかながき

譚のくいちがつていと思われるところを幾つかあげると、

キンさん チヨウさん こや まごも 金張世錄原。憲貧

きれいな かんむり かむってる 「新」

コウケン。 りっぱな ひとなのに 黄 「成」

まずしく ぼろの きもの きる

(コウケンには注がある) (新樂府 潤底松 一一一、一一〇頁)

ともだちが いないと いうな 勿言無己知 「新」

。知己 「成」

(常樂里閑居 一六九頁)

もや かすみ へだてて ゲンボ 煙雲隔玄圃 「新」

。霞 「舊」

(效陶潛體十六首之十一 一九四頁)

と。お。か。でも にくを わすれる 經時。不思肉 「新」

。旬 「成」

(食笋 二三五頁)

よなかの よじの みずどけい 五聲宮漏初明後 「新」

さきほど なった ばかりだが 鳴 「成」

(禁中夜作書與元九 三〇九頁)

ひとり かどべに たたずんで 獨出前門望野田 「新」

のらを はるかに みわたせば 門前 「成」

(村夜 三二三頁)

以上あげた例から、譯をする時は大成本を用いられたことは確認できるが、著者の生前に、諸諸の疑問點についてご意見を聴けなかったのが残念である。著者の心残りは、

筆者にとっても心残りである。

なお、この「新版」が出た後も、著者の譯詩は續いてお

り、亡くなられて後も次の六篇が「V」に連載されている。

(一) やまいの あきに きやくを まねいて

病中逢秋招客夜酌 V 三六一號 一九八一年一月

(二) なかほどの いんじや 中隱

V 三六二號 一九八一年二月 (武部氏二十二日死去)

(三) としの くれ 歲暮 V 三六三號 一九八一年三月

(四) にしの やくばで すぐんだから かえる

府西亭納涼歸 V 三六四號 一九八一年四月

(五) やくにんの いえ 官舎

V 三六五號 一九八一年五月

(六) みなみの あずまやで さけを まえに はるを お

くる 南亭對酒送春 V 三六六號 一九八一年六月

ちなみに、最終の「V」三六六號は武部利男追悼號であり、廣重氏の「武部利男の手紙」と題して、その内容が公開されているので、これらの六篇の詩の譯された日が大體分る。それによれば、

(一) (一九八〇年) 一〇月二〇日 (二) 一〇月二一日 (三) 一〇月二三日 (四) 一〇月二五日 (五) 十一月四日となっており、その死の前年、というより四ヶ月ほど前に、たて續けに送付された由である。選んだ詩はもの靜かな題材の詩が多く、樂天が五十歳を過ぎて以後の作である。「大成本」(「白香山詩集」)では、「新版」の最後のV章の二篇とともに、「後集」の卷一から卷三に見える。このV章の詩の譯詩の數を増して、將來は更に第三次の「新々版」の「白樂天詩集」の刊行を予定しておられたのだろうか。

○

白樂天の詩が、日本では古くから他の唐の詩人にもまして一般的に好評を得ているわりには、その譯注は餘り出ていない。本國の中國でも事情は同じである。全詩に何とか曲りなりに譯注が施されているのは、先にふれた「漢文大成本」だけであり、何とも心もとない思いである。この「新版」には、もてはやされる白樂天の一部の詩を含めて、餘りもてはやされない詩も選んであり、一般の讀者にそうした詩を紹介するのに、かながき譯は有効に作用している。

書評

一一あげないけれども、なくもがなの注や、ひねくり廻しすぎて、これでは原詩の方がすっきりしているような譯注に比べれば、詩人の意圖をはっきり把握した名譯が幾つかあるが、かながき詩集としての評價は筆者にも下せない。ただ漢字の側に、より拘泥する専門家にとっては、ここまで大膽な飛躍の勇氣はまだ持てず、途惑いのなかで、漢詩の翻譯の未來の方向を、我我の前に提起し残していかけたものとして受けとめるべきであろうか。

(四天王寺國際佛教大學 西村富美子)

〔補遺〕

この書評の校正中に武部氏の遺稿集「李白の夢」(序 小川環樹、編集 村上哲見)が、筑摩書房から出版された(十月三十日)。筆者が擧げた「漢詩の翻譯についての感想」、「歴代詩選評」、「漢詩の翻譯おぼえがき」の三篇の論文、及び新版「白樂天詩集」未收の六篇の譯詩は補遺として、ともに收められていることを追記しておく。